

TREND IN ALLERGY

アレルギーをめぐるトレンド

SUGAYA Makoto

菅谷 誠

国際医療福祉大学皮膚科学教授

アトピー性皮膚炎に対する生物学的製剤 Biologics for atopic dermatitis

アトピー性皮膚炎はバリア機能異常、Th2優位の免疫反応、難治性の瘙痒をおもな病態とする皮膚疾患である。最近になって病態の理解が進み、発症に重要な分子をターゲットにした治療が開発されてきている。

アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis ; AD) の多くの症例は、①ステロイド外用薬、タクロリムス軟膏などの抗炎症薬を中心とした外用療法、②悪化因子の検索や入浴などの生活指導、③保湿薬によるスキンケア、といった一般的な治療で寛解導入が可能である。しかし一部の重症患者では、これらの治療のみでは難治なことがある。現在、難治性のADに対して、生物学的製剤が開発されてきている。

AD患者の血清や病変部皮膚では、IL-4やIL-5などのサイトカインを産生するTh2細胞が優位となっていると考えられている。Th2サイトカインによって線維芽細胞からペリオスチンが産生され、ペリオスチンは表皮細胞を刺激してTSLP (thymic stromal lymphopoietin) 産生を促すことが近年判明した¹⁾。TSLPは樹状細胞を介したTh2系の免疫誘導に重要であることが知られており、Th2サイトカイン-ペリオスチン-TSLPという悪循環が成立していると考えられる(図)。この悪循環を断ち切ることがADの改善に役立つと考えられており、IL-4受容体 α サブユニットに対する抗体であるデュピルマブが2018年1月に本邦で承認された。IL-4受容体 α サブユニットはIL-4受容体とIL-13受容体の共通サブユニットであるため、IL-4、IL-13両方のシグナルを阻害する。中等症から重症のAD患者に対するデュピルマブの治験では、非常に有望な結果が得られている²⁻⁴⁾。Eczema